



TITLE:

チンギス=ハーン廟の源流

AUTHOR(S):

白石, 典之

---

CITATION:

白石, 典之. チンギス=ハーン廟の源流. 東洋史研究 2005, 63(4): 866-847

ISSUE DATE:

2005-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/138147>

RIGHT:

# チンギス = ハーン廟の源流

白 石 典 之

- 1 問 題 の 所 在
- 2 大オルドの位置
- 3 宮殿遺構の調査結果
- 4 チンギス = ハーン祭祀の痕跡
- 5 靈廟の成立と變遷
- 6 内モンゴルへの移轉
- 7 移 動 の 背 景
- 8 ま と め

## 1 問 題 の 所 在

現在、中國內蒙古自治區鄂爾多斯（オールドス）市の伊金霍洛（エジン = ホロー）旗に「成吉思汗陵」と呼ばれる建物がある。「陵」とはあるが墓ではなく、チンギス = カンの遺品を祀った靈廟である。本論ではそれを「チンギス = ハーン廟」と呼ぶことにしよう<sup>(1)</sup>。そこはモンゴル民族の精神的據り所であると同時に、古式に則った祭儀を残していることから、モンゴル文化を知る上で重要な場所となっている。歴史學はもちろん、現在に暮らすモンゴル民族を正しく理解するためにも、その研究は無意味ではなからう。

現在の廟（新廟）は、1956年に竣工したものである。その前身（舊廟）は、

---

(1) モンゴル時代は“カン（王）”，“カアン（皇帝）”は皇帝の意味で、チンギスは生前“カン（王）”の稱號で呼ばれた（杉山 1999: 71）。死後しばらくの時を経て、英雄視が強まり“カアン”で呼ばれるようになった。カアンは現在では“ハーン”と發音する。筆者は通常“カン”を用いているが、現在モンゴルでは一般的にチンギス靈廟を呼稱する場合“ハーン”を使用しているので、本論では靈廟（祭祀）に關連する部分を“ハーン”とする。

新廟の南東1 kmほどの地點にあった。今は基壇と小さな祠が残るだけである<sup>(2)</sup>。だが、それも元來の靈廟ではない。エジン＝ホロー地域に靈廟が移ってきたのは清代初頭で、それ以前は、黄河により北東西の三方を圍まれたオルドス地域を轉々としていたという (Pelliot 1959: 352, 陳 2002: 411-419)。さらに、そもそもこの廟は、内モンゴルにあったものではないとされる。オルドス地域は元滅亡以來、明の支配下に入った。それをモンゴル側が奪還したのは15世紀半ば過ぎのことで、内モンゴルに廟が出現するのは、その後と考えられている (Pelliot 1959: 352, 村上 1976: 286)。しかしながら、その時期が正しいかは、なお検討しなければならない。

それでは内モンゴルに現れる以前、廟はどこにあり、いつ成立したのだろうか。廟は「八白帳 (naiman čayan ger)」または「八白室」とも呼ばれている。それは1266 (至元3) 年にクビライにより、大都 (現在の北京) に設けられた「太廟<sup>(3)</sup>」に由來するとの意見と、チンギス死去 (1227年) 直後に、漠北に造られた彼の墓の傍らに設けられた廟に由來するとの意見とがあり<sup>(4)</sup>、その起源については明らかになっていない (楊 1995: 34-35)。

そのような中、筆者たち研究グループは、2001年にモンゴル國北東部のヘンティ縣デリゲル＝ハーン郡アウラガ遺跡で、モンゴル時代の靈廟と考えられる建物遺構を発見した<sup>(5)</sup>。上記の問題點を解明できる手がかりを與えてくれるものと注目している。

(2) 舊廟は北緯39度21分39秒、東經109度47分56秒の地點に残る。

(3) 『元史』卷74祭祀志「四年 (中統4 [1263]年) 三月癸卯、詔建太廟于燕京。(中略) 至元元 (1264) 年冬十月、奉安神主于太廟、初定太廟七室之制。(中略) 三 (1266) 年秋九月、始作八室神主、設祔室。冬十月、太廟成。(中略) 定爲八室」(『元史』〈宋濂 [撰]〉は中華書局1979年版を使用。以下『元史』からの引用は同様である)。「燕京 (金の中都)」は後の大都の一部となる。

(4) 森川哲雄氏 (森川 1999: 111) などがこの見解を採る。その根據のひとつに『蒙古源流』の「アルタイ＝ハン山の山陰、ヘンティ＝ハン山の山陽のイエケ＝オテグ (Yeke öteg)」にチンギスの亡骸を安置し、「八白室」というチンギスの靈廟を設けたという記述があろう。『蒙古源流 (Erdeni-yin Tobči)』(Sayang sečen [撰]) は烏蘭 (中國蒙古學文庫、遼寧民族出版社、2000年) の231頁と601頁より筆者譯。アルタイ＝ハン山とヘンティ＝ハン山は外モンゴルの地名である。

(5) 北緯47度05分49秒、東經109度09分42秒、海拔1205mに位置する。

本論では、その遺構の性格を検討しながら、それがチンギスの靈廟であったということを明らかにし、かつ、それが内モンゴルに現存する廟の初源形態であったことを論證する。これらを通して、チンギス＝ハーン廟というものが、いつ、どこで、どのように成立したのかを實證的に考察したい。

## 2 大オルドの位置

14世紀に書かれたペルシャの史書『集史』テムル＝カアン紀には、「(カマラは)ブルカン＝カルドゥン [*Burqan-Qaldun*] と呼ばれ、チンギス＝カンの大オルドス [*ordos*] がそのままある、チンギス＝カンの大禁區 [*ghorug*] を統轄した。これらはカマラにより守られている。そこには4つの大オルドスとその他5つ(のオルドス)、全部で9つがあり、誰もそこに近づけない。そこには彼ら(先帝)の肖像畫があり、いつも香が焚かれている」<sup>(6)</sup>とある。これはチンギスの残した宮廷「大オルド(オルドスは複數形)」が先帝の靈を祀る場所になっていたことを示す。大オルドとは、移動生活を送るチンギスの季節宮廷の中でも、その中心となるものであった<sup>(7)</sup>。

それでは大オルドとはどこか。史料から探してみよう。1232年舊12月から翌年舊2月にかけて、オゴダイはチンギスの遺宮である「太祖行宮」で越冬した<sup>(8)</sup>。ちょうどそのとき、南宋の使者がオゴダイを訪ねた(王 1959/94: 804-807)。その一行にいた彭大雅の『黑韃事略』の記述からは、そこは他の駐

(6) 『集史』(Rashīd al-Dīn. *Jāmi' al-Tavārikh*) は Boyle (1971) より筆者譯。該當箇所は322頁。譯文中の丸括弧内は筆者補譯。

(7) 那珂通世氏(1907/43)、箭内互氏(1930/66)の研究以來、チンギスの4人の主な后妃は「四大斡耳朵」と後に呼ばれた各自別々のオルド(宮殿)を有し、チンギスはその4カ所の間を移動していたというイメージが定着していた。それに対して宇野伸浩氏は、チンギスと后妃たちは一つの場所に生活し、共に季節移動していたと史料から復元した(宇野 1988)。筆者は宇野氏の見解に基づき、チンギスには「ヘルレン大オルド」、「サアリ＝ケール」、「カラトン」という3ヶ所の季節營地があり、その間を、后妃たちを伴い周回移動していたと理解している(白石 2001・2002)。

(8) 『元史』卷2太宗本紀「(太宗四[1232]年)十二月，如太祖行宮。(中略)(五[33]年)二月，幸鐵列都之地」。

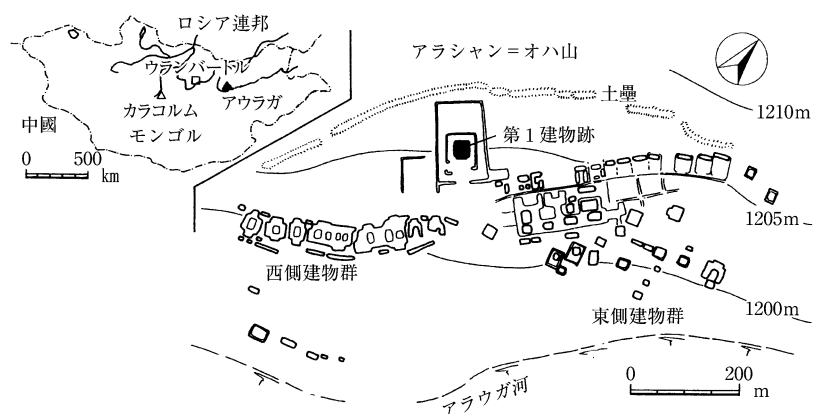


図1 アウラガ遺跡の遺構配置図

營地とは區別して唯一「大オールド」と呼ばれていたことがうかがえる<sup>(9)</sup>。「太祖行宮」が「大オールド」とも呼ばれたことが2つの史料からわかる。さらに滞在季節からみて、そこが冬營地だったこともわかる。

それではチンギスの冬營地は、どこにあったのか。『元史』に「太祖6年春に、帝は怯緑連河にいた。翌年2月には南伐（金國征伐）に出征した」<sup>(10)</sup>とある。これからチンギスは太祖6（1211）年の1月に「怯緑連河」、すなわち外モンゴルのヘルレン河流域にいたことがわかる。通常、遊牧民は新春を冬營地で迎える。この地域にチンギスの冬營地、言い換えると大オールドがあった可能性が高い。

この記述をもとに、筆者はヘルレン河上流部にあるアウラガ遺跡という場所に注目し、踏査をした（図1）。ここがチンギスの大オールドの跡であるという傳承が地元に残っていたからだ。また、アウラガ（Avraga）とはモンゴル語で後方支援基地の意であるアウルク（a'uruq）の轉訛であるという（Maidar・Maidar 1972: 151）。『元朝秘史』271節で“a'uruq”は“yeges ordos”すなわち「大オル

(9) 『黑韃事略』「獨曰大窩裏陀」。『黑韃事略』（彭大雅〔撰〕・徐霆〔疏〕）は王國維（1928）より。

(10) 『元史』卷1太祖本紀「六（1211）年辛未春、帝居怯緑連河。（中略）二月、帝自將南伐（後略）」。

ド」と同義で用いられている（栗林ほか編 2001：576）。これに注目したい。

遺跡周辺の地形を観察すると、そこは、丘陵地帯の間をアウラガ河という小流が蛇行しながら開析した谷中にあり、また、北にはアラシャン＝オハ山があって、北寄りの冬の季節風を弱めている。彭大雅は『黑韃事略』で、大オールド周辺の地形を詳しく記述している。それによると、「その地は小河が丘の間を曲がりくねって流れていて、丘が風の勢いを弱めている」<sup>(11)</sup>という。アウラガ遺跡の立地はその記述ときわめてよく一致していた。寒冷な風が弱いことは遊牧民の冬営地として最適である。現に、今でもここは冬営地として利用されている。

アウラガ遺跡は、東西1200m、南北500mの範囲に大小の建物跡が残っている。ほぼ中央にある一辺約30mの方形の大型基壇を中心に、その左右（東西）に小型建物基壇が、鳥が羽を広げたように、延びているという遺構配置である。中央の大型基壇の南側には、基壇の認められない空き地が存在する。『黑韃事略』は「皇帝の宮殿テントは南向きで、一つだけが前列にあり」<sup>(12)</sup>と記し、宮殿の前には何も建物がなかったようすを伝えている。

以上から、筆者は、アウラガ遺跡がチンギスの大オールドで、しかも、その中央にある大型基壇が、宮殿跡と理解している（白石 2001・2002）。

### 3 宮殿遺構の調査結果

筆者たちは中央にある大型の基壇を發掘した（第1建物跡と呼ぶ）（圖1）。基壇は舊地表面に約60cmの版築盛土をすることにより構築されていて、その上面を平坦にし建物を築いている。調査により同じ場所に3回繰り返して建物が築かれていたことがわかった（圖2）。

最初に築かれたのは、掘っ立て柱による、方形（おそらく正方形）プランの建物であった。一辺の長さは17.6mであった。屋根瓦やレンガは伴わないので、

(11) 『黑韃事略』「其地卷阿，負坡阜以殺風勢」。ここで述べられている風とは、使者が大オールドを訪れたのは冬季であったことから、寒冷期の北よりの季節風と考えてよからう。

(12) 『黑韃事略』「主帳南向獨居前列（後略）」。

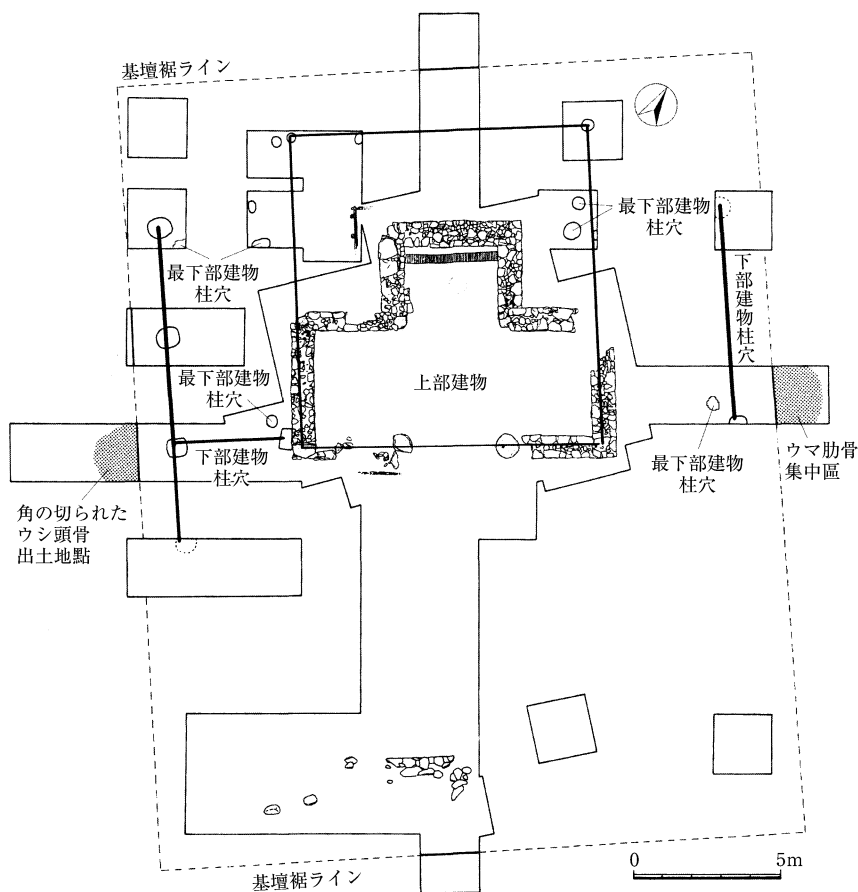


図2 第1建物跡遺構配置図

テントタイプの上屋であったと考える。これを「最下部建物」と呼ぶ。

その後、同じ床面を用い、柱の位置を若干変更して、再び建物を建造している。これを「下部建物」と呼ぶ。掘っ立て柱と、基礎に礎石を用いる柱を併用した建物で、屋根瓦やレンガはない。これも最下部建物と同じように、方形（おそらく正方形）プランのテントタイプの上屋であったと考えられる。規模は最下部建物よりも一回り大きく、一辺の長さが19mであった。

さらに、その上に50cmほどの版築土盛をして、3度目の建物を建造している。これを「上部建物」と呼ぶ。掘っ立て柱と基礎に礎石を用いる柱とを併用し、

世 紀 四半期	12		13				14				15
	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ
1尺=31.6cmの尺度使用期間			—————				—————				
上部建物炭素14年代							—————				
上部・下部建物中間層炭素14年代			—————								
最下部建物炭素14年代	—————										

図3 考古學的資料より得られた年代

床面には日干しレンガが敷かれていたが、ここからも屋根瓦の出土はない。テントタイプの上屋とみられる。正方形プランで、建物の一辺は11mであった。

なお、下部建物と上部建物の間には、風成の腐植土層が形成されていた。これはこの間、基壇上に何も建築物がなく、露地であったことを示している。

考古學的な年代はどうか（図3）。放射性炭素（炭素14[ $^{14}\text{C}$ ]）測定法による年代をみると、最下部建物は12世紀末から13世紀前葉に中心値をもつ2つのデータが得られた<sup>(13)</sup>。また、上部建物では14世紀中頃に中心値をもつデータが得られた<sup>(14)</sup>。これとは別に、柱の間隔から、造営に際し下部建物と上部建物では、1尺が31.6cmの物差しが用いられていたことがわかった。この尺制は、モンゴル高原では13世紀前葉から14世紀第Ⅱ四半期まで使用されていたことがわかっていて（白石 2002: 152-159）。すると、上部建物の建造は14世紀第Ⅱ四半期以前ということになる。

さて、チングスの宮殿はどの時期に相当するのだろうか。前述のような考古學的年代からいえば、最下部あるいは下部建物がそれに相当しよう。この両者は、多少の貼り床などの盛土はあるが、ほぼ同じ床面を使用している。柱の配置を変更し、その基礎に礎石を用いることと、下部建物の方が一回り大きいというだけの違いである。最下部建物から下部建物への変化は、増築あるいは改

(13) 本遺跡における放射性炭素測定年代はすべてAMS法による暦年較正（1 $\sigma$ ）を行ったものである。最下部建物からは木炭より西暦1190～1270年（Beta-160566）、1160～1225年（Beta-171231）という年代が得られた。

(14) 上部建物の放射性炭素測定年代には、焼け骨の1290～1320、1340～1390年（Beta-160567）と、木炭の1310～1360、1385～1410年（Beta-171229）とがある。



築という軽微な変更であった。

史料には、1229年オゴダイは「即位後、行宮の幄殿を改造した」、つまり先帝チンギスの宮殿を改造して、自らの宮殿としたという<sup>(15)</sup>。この工事責任者は劉敏という人物であった。劉敏は、1235年にカラコルムに造られた宮殿「萬安宮」の造営も指揮していた<sup>(16)</sup>。ここで、下部建物と萬安宮の平面形を比べてみる。すると、前者は31.6cmを1尺とする当時の尺度で60尺の正方形、後者は120尺の正方形というように、一辺が2倍、面積が4倍になる相似プランであった。両者に設計上の関連があったことが想定できる。

筆者は同一工人、つまり劉敏の關與で、相似プランが採用されたと考えている。さらに、下部建物が最下部建物の改築だとすると、史料の「改造」という記述とも一致しよう。

そうであるならば、下部建物がオゴダイの宮殿テントということになり、最下部建物がチンギスの宮殿テントであったと理解できる。さて、上部建物であるが、これについては、のちに議論することにした。

#### 4 チンギス = ハーン祭祀の痕跡

宮殿の基壇裾の、13世紀第Ⅱ四半期～第Ⅲ四半期に相當する地層<sup>(17)</sup>から、家畜獸骨が集中して出土する場所が検出された。骨が意圖的に置かれたような出

(15) 原文は『元史』卷153劉敏傳「己丑（1229年），太宗即位，改造行宮幄殿」。太宗の即位式は『元史』卷2太宗紀によると「庫鐵烏阿刺里（コデウアラリ）」という場所で行われたとある。「コデウアラリ」はヘルレン河屈曲部にある中洲のことだと考えられ、現在「フドーアラル（Khödöö aral）」という地名が残る（Bazargür・Enkhbayar 1997）。ここはアウラガ遺跡から10kmほどである。この至近距離を考慮すると、ここでいう改造した行宮幄殿とは大オールドにあったチンギスの宮殿テントであったと理解できる。

(16) 『遣山先生文集』卷28丞相劉氏先塋神道碑「行宮改新帳殿，城和林起萬安之閣宮闔司局，皆公發之」。なお『遣山先生文集』（元好問 [撰]）は『四部叢刊』（222，上海書店，1989年）より。

(17) 獸骨検出は、下部建物の基壇が若干崩落した部分であった。宮殿の管理が十分にされていなかったことが想定できる。1235年に據點がカラコルムへと移轉して後のものだろう。また、獸骨層の上面から出た木炭の放射性炭素年代は、1210～1270年（Beta-171230）であった。これらにより年代を想定した。

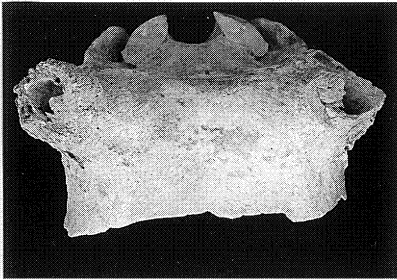


写真1 角を切られたウシ頭骨

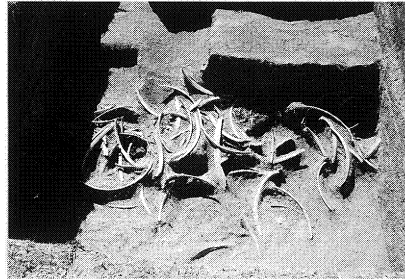


写真2 ウマ肋骨集中区

土状況や、特定の部位の骨だけが集中するということからみて、ゴミ捨て場ではなく、そこにおいて特定の家畜動物を犠牲とする儀式が行われていたことがわかる。

基壇西裾では、ウシ頭骨が出土した（写真1）。胴體部はなく、頭骨だけが安置されていた。その兩角は鋭利な刃物で切斷されていた。明らかに何らかの意味をもつ犠牲である。『元朝秘史』121節に「コルチが来て言うのに（中略）角のなき淡黄色の牛は大なる下床を上にもちあげ、それを駕し拽きて、テムジンの後えより大道を吼えしつつ近づき來るに、天地相和して『テムジン、國の主たれ』とて國を載せ持ち來たる。かく、神のお告げを己が目に見せ、我に告ぐ（下略）」（小澤 1997: 113-114）という記述がある。これは、神が“角のない牛”を使わしてチンギス（テムジンは本名）に即位を促していると、シャーマンのコルチがテムジンに伝える場面である。角の切られたウシと皇帝即位儀禮とに何らかの関連のあったことが想定できる。

『元史』卷29泰定帝本紀には、1323（至治3）年に、イエスン＝テムル（泰定帝）が「成吉思皇帝（チンギス＝カン）の大斡耳朵（オルド）で、皇帝に即位した」<sup>(18)</sup>とある。モンゴルの歴代皇帝は即位のとき、あるいは即位後にチンギスの靈廟を参拜し、その御前で自らの正統性を確認しなければならなかったという（楊 2001: 72-73）。

(18) 『元史』卷29泰定帝本紀「〔至治3〔1323〕年〕於成吉思皇帝の大斡耳朵裏，大位次裏坐了也」。この即位式の行われた場所をチンギス＝ハーン廟とみる意見が示されている（岡田 1985: 173-174）。

さらに、基壇東裾からはウマ肋骨を300本以上集積した遺構が検出された（写真2）。1頭のウマの肋骨は36本なので、数頭分の肋骨がここに集まっていることになる<sup>(19)</sup>。元代において、ウマは祭禮にしばしば用いられていたが、特別な場合が多かったと想定できる。『草木子』巻3下雜制篇には「元朝の人が死ぬと、焼飯という祭りを行った。その大祭は焼馬である」<sup>(20)</sup>とある。「焼飯」とは北方民族にみられた祭祀習俗で、穴を掘り、そのなかに犠牲獣や飲食物を入れて焼くというものである（陳 1980）。『草木子』によると、その大祭は「焼馬」といい、ウマを犠牲としていたことがうかがえる。『元史』巻74祭祀志にも、歴代皇帝の靈を祀る宗廟の大祭において、馬乳などとともに、ウマの犠牲を用いるとある<sup>(21)</sup>。

20世紀前半にエジン＝ホローでの民族調査をしたモスタールト（Mostaert, A.）は、一般ではほとんど食用にされないウマが、ここではチンギスの靈前に供するために用いられ、その際、牝ウマの肋骨のうち、とくに大きな4本の肋骨「ドウルブン＝ウンドル（dörvön öndör 4つの尊きもの）」が選ばれていると報告している（Mostaert 1956: 280-281）。アウラガ出土のものは、かならずしもドウルブン＝ウンドルに限定されていない。ただ、長さ30cm以上のものが多かった。肋骨のなかでも比較的長いものが、意圖的に選擇されていたことがわかる。使用される牝ウマは妊娠経験のない3～5歳であるというが（楊 1996: 669）、アウラガでは比較的年齢が若いというだけで、具體的な齡構成は不明であった。また、性別は、肋骨部分だけなので、判定できなかった。さらなる調査を要するが、大きなウマの肋骨が意圖的に集積されているという特殊性から判斷して、アウラガの宮殿基壇部が、歴代皇帝の靈を祀る場所、とくにチンギス＝カンの靈を祀る場になっていたと考えてよさそう。

(19) 鑑定はハーバード大学教授で動物考古學者の Richard H. Meadow 氏と、アウラガ遺跡調査團員で動物考古學者の加納哲哉氏による（三宅・加納・内田ほか 2004）。

(20) 『草木子』巻3下雜制篇「元朝人死、致祭曰焼飯、其大祭則焼馬」。『草木子』（葉子奇〔撰〕）は元明史料筆記叢刊、中華書局（1997年、初版1959年）より。

(21) 『元史』巻74祭祀志「凡大祭祀，尤貴馬湏。將有事，敕太僕（司）〔寺〕捫馬官，奉尚飲者革囊盛送焉。其馬牲既與三牲同登于俎，而割奠之饌，復與籩豆俱設。將奠牲盤醇馬湏，則蒙古太祝升詣第一座，呼帝后神諱，以致祭年月日數，牲齊品物，致其祝語。以次詣列室，皆如之。禮畢，則以割奠之餘，撒於南樞星門外，名曰拋撒茶飯。蓋以國禮行事，尤其所重也」。

## 5 靈廟の成立と變遷

### (1) 靈廟の成立

それではチングス靈廟はいつ成立したのか。この地での祭祀行為を示す最初の史料は、『元史』卷3 憲宗本紀にある、1257年にモンケ（憲宗）が「太祖（チングス）の行宮を謁し、旗鼓の祭りを行った」である<sup>22)</sup>。この段階までには、大オールドが祭祀的色彩を帯びていたことがわかる。

すでに述べたように、ここでは13世紀第Ⅱ四半期～第Ⅳ四半期に家畜獸犠牲を伴う祭祀行為が開始された。出土層位の對比から、この時期に基壇上には、下部建物がそのままの状態に残っていたと考えられる。下部建物と上部建物の中間層には、露地になっていたことを示す風成の腐植土層がみられたが、ウシ頭骨やウマ肋骨集中などのチングス祭祀の痕跡は、その腐植土層よりも下からであった。

チングスの宮殿として建てられ、オゴダイが改造した“祖宗興隆”時代の建物が、靈廟として使われたとしても不思議ではない。1235年に帝國の中心地機能カラコルムへ移轉して以降、1257年のモンケの祭祀行為までの間に、残置していた下部建物が靈廟として使われるようになったと想定できる。筆者は、これをもってチングス＝ハーン廟の成立と考えている。

### (2) 靈廟の變遷

それではこのような神聖な靈廟テントが消失するような出来事、つまり基壇上に風成の腐植土層の形成が、なぜ起こったのだろうか。筆者はシリギの亂との関連を想定している。諸王シリギらが、クビライ政權に對して反亂を起こしたこの漠北の動亂のなかで、1277（至元14）年に「祖宗の大帳」が反亂軍に掠奪されるという事件が起こった<sup>23)</sup>。この大帳とはチングス大オールドに残る靈廟

<sup>22)</sup> 『元史』卷3 憲宗本紀「夏六月，謁太祖行宮，祭旗鼓」。

<sup>23)</sup> 『元朝名臣事略』卷3之3 樞密句容武毅王「至元十四（1277）年，諸王脫脫木，失烈吉叛，北平諸部暨祖宗所建大帳，盡爲所掠」。『元朝名臣事略』（蘇天爵〔輯撰〕）は中華書局版（1996年）より。

テントであったと想定する。それを保持することが、権力の象徴や正統性を表わしたからだろう。この奪われた大帳は、取り戻したトトハに下賜され、もとの場所に戻ることはなかった<sup>24)</sup>。その結果、しばらくの間ここが露地となったと理解している。

その後、新たにチンギス＝ハーン廟が建てられた。それが上部建物だと想定している。露地の形成開始が1277年だとすると、13世紀第Ⅳ四半期から、前述の考古學的年代からみたように、14世紀第Ⅱ四半期までの間に、この建物が造られたことになる。『集史』テムル＝カアン紀をみると、カマラが晉王として大オールドに着任していた頃、すなわち1292～1302年には靈廟があったとあることから<sup>25)</sup>、14世紀初頭までには建造されたとみることができる。

上部建物跡に伴い、前述のような家畜動物骨集中區は検出されていないが、散発的にかなりの量の出土はみられる。それを分析した結果、ヒツジ・ヤギ類が最も多いが、ウマの骨も少なからず出土していることがわかった（加納・内田ほか 2003:145）。また、基壇裾の同時期の層位からはウマを主體とする焼けた家畜骨と灰とが詰まった土坑が、複数発見された。前述の「焼飯」の根拠と考えている。土坑は、現在その實数は不明だが、基壇周囲にかなりの數にのぼると想定される。ウマを犠牲とする何らかの祭祀行為が、下部建物があつた時期から繼續していたことがうかがえる。下部建物でのウマの犠牲を用いる行為が、チンギスに關連する祭祀であつたことを考えると、やはり上部建物もチンギスの靈廟であつたと考えるのが妥當であろう。

24) 『元史』卷128土土哈傳「〔至元〕十五（1278）年（中略）還朝，帝召至榻前，親慰勞之（中略）仍賜以奪回所掠大帳」。

25) 『集史』テムル＝カアン紀（前出註6）より。年代は『元史』卷115顯宗傳「〔至元〕二十九（1292）年，改封晉王，移鎮北邊，統領太祖四大斡耳朵及軍馬，達達國土（中略）〔大德〕六（1302）年正月乙巳，王薨，年四十」より。さらに、それにさかのぼり『元史』卷117牙忽都傳には「〔至元21〔1285〕年〕北安王駐帖木兒河，乃顔，也不堅有異圖，也不堅引兵趨怯綠憐河大帳」とある。當時北安王ノムゴンは漠北を統領していた。「帖木兒河」は『大清一統輿圖』では「齋母爾喀河」とつくる。これは『大清一統輿圖』（乾隆25年銅版印行，全國圖書館文獻縮微複制中心，2003年）の位置關係からアウラガ遺跡北方100kmを流れるホラホ（Quraq）河のことである。「怯綠憐河大帳」とはヘルレン河流域にある大オールドに建つチンギスの「大帳」，すなわちアウラガ遺跡と考えてよい。すると，1285年ごろには新たな帳殿が再建されていたとも考えられる。今後の検討課題としたい。

この建物に伴い陶器香爐が出土していることは、この想定を補強しよう。香爐は設置式で脚部は3足である。推定高10cmほど、緑・黄色の二彩で胴部には型押しで浮き出た龍文がみられる。この香爐の用途は、元上都南郊の砧子山遺跡の墓葬遺構から同形の香爐が出土していることから（内蒙古文物考古研究所ほか 1994: 651-652）、送葬儀禮との関連すると指摘できる。『集史』には「(チンギスの大オルドには先帝の)肖像畫があり、いつも香が焚かれている」<sup>26)</sup>とあり、一致點がみられる。

### (3) 靈廟の廢絶

それではこの靈廟はいつまで機能したのだろうか。『蒙古源流』にはオイラトのトゴン太師がチンギスの靈廟テントを襲い、逆にチンギスの祟りにあって死ぬという話が出てくる（烏蘭 2000: 270/628）。トゴン太師の死は1440年頃とみられる（森川 1999: 90）。この話が史實とは考えにくいだが、このころトゴン太師がヘルレン河流域を行動圏としていた可能性がある<sup>27)</sup>。傍流部族のオイラトがチンギスの靈廟を庇護し、その影響力をもって主流部族のモンゴルを統治する手段としていたとも考えられる。15世紀中頃まで靈廟が機能していたと想定できる。

上部建物から出土した陶磁器片の大部分は14世紀代のものであったが、一部に15世紀中頃のものと考えられる景德鎮窯の青花磁器が出土している<sup>28)</sup>。これは上部建物の存続年代の最末が、15世紀中頃であったことを示すといえる。筆者は、15世紀中頃までチンギス＝ハーン廟がアウラガの地にあったと考えたい。

上部建物を發掘した所見によると、この建物は、自然災害や人的災害、つまり火災、戦亂や略奪などで廢絶したものではなく、何らかの意圖をもって、そ

<sup>26)</sup> 前出註(6)に同じ。

<sup>27)</sup> 『明實錄』「(正統2 [1437]年)十月壬午、敕宣府總兵官都督譚廣等曰比聞瓦剌脫歡聚兵飲馬河。」「(同年)十一月己亥、初上聞瓦剌脫歡部落屯飲馬河」。なお、「飲馬河」は『北征錄』（永樂8年5月1日）に「上攬轡登其頂四望而下、又行數里臨臚胸河、立馬久之賜名飲馬河」とあるようにヘルレン河のことである。『明實錄』は中央科學院歷史語言研究所（1962年）、『北征錄』（金幼孜〔撰〕）は『紀錄彙編』（卷32、民智出版社、1965年）より。

<sup>28)</sup> この資料の鑑定は、中國と日本の4名の景德鎮磁器研究者に依頼した。その結果はすべて15世紀中頃という年代觀で一致した。

の建物の役割を終了させられたという感じを抱かせる。それというのは、事件や事故などで廢絶した建物床面からは、通常多くの遺物が出土するが、ここでは床面は清掃したように、ほとんど遺物の無い状況で検出されたからだ。また、柱穴に柱材などの建築材も残っていなかった。これらの状況は、この建物は、外部構造と内部の物品とが、一度にどこかへ運びさられたということ、つまり、“移動”あるいは“移築のために搬出された”という言葉が當てはまるような廢絶のようすを示している。

文献史學の先行研究では、前述の通り15世紀末から16世紀初頭に、内モンゴルにチンギス＝ハーン廟が移ってきたとされる（Pelliot 1959: 352 など）。今のところ、この見解を否定する材料はなく、今回の考古學資料からの検討結果は、むしろそれと整合的である。

## 6 内モンゴルへの移轉

つぎの問題は、アウラガの建物遺構とエジン＝ホローの靈廟との関係である。すでにみたように、アウラガ遺跡におけるウマを用いた祭祀と、エジン＝ホローにおけるそれとは、内容的にきわめて類似していることがわかった。それではここで、遺構、すなわち建物の構造面から、両者の類似性をみておきたい。

兩者とも、屋根瓦やレンガを用いない上屋構造であった。エジン＝ホローで、20世紀半ばまで残存していた、新造前のチンギスの靈廟テント（*чюмчюк чомчо*）は、フェルトの天幕に覆われていたことが、記録寫眞からわかる（Dulnuikov 1958: 231）。おそらくアウラガの建物の上屋も、フェルトの覆いを掛けたタイプであったと想定できる。

また、兩者とも基礎部分が正方形のプランをもつ。エジン＝ホローは外見では一般の圓形プランをもつフェルトのテント「ゲル（パオ）」と変わらないが、その基礎部分は正方形であると報告されている（Potanin 1885: 304, Andrews 1981: 10）。筆者の實見でも、現存する靈廟テントの基礎部平面形は正方形であった。

さらに、基壇の規模を比較してみよう。最下部裾の正面長（南側の東西長）は、アウラガ遺跡の場合は25.3mであった。エジン＝ホロー舊靈廟のものは、

正確な計測値は明らかでないが、20世紀中頃に撮影された写真記録から、約25mと推定されている（Andrews 1981: 8）。筆者の現地踏査の結果、基壇は崩壊して原状をとどめていなかったが、若干の高まりが残っており、その規模は長軸約40m、短軸25mであった。短軸（東西方向）はアウラガとほぼ同規模とみてよからう。エジン＝ホローでは、基壇の北半分だけ、さらに土盛をして上段を築いている。その高さは50cmほどである。その部分に建物を建て、基壇南半分の低い部分（下段）には建物を築いていない。アウラガの上部建物でも、同様に南半の、若干低い部分には建物はなかったと、現時点では想定している。

アウラガ上部建物の一辺は11mであった。エジン＝ホローの場合は2つのテント（チョムチョク）が連結してひとつの靈廟を構成しているという違いがあるが、その全長は10.5mであった（Andrews 1981: 10）。ほぼ近似値といえる。

このように建物遺構からみる限り、アウラガ遺跡の靈廟、とくに上部建物とエジン＝ホローのチングス＝ハーン廟とは、きわめて類似した構造であったことがわかる。さらに、アウラガの上部建物および基壇は、白色の粘土で全體を“化粧”していたことも確認できた。機能していた當時は、まさに「白帳（白室）」の名にふさわしい外観であった。

遺物からみると、前述の陶製三足香爐があげられる。アウラガでは、この香爐の出土位置は上部建物の南側で、基壇昇降口部分の基壇上であった。エジン＝ホローの舊靈廟址でも、まったく同じ場所に三足香爐が置かれていたことが、写真資料からわかる（Rintschen 1959: 13）。

このように基本的構造、とくに基壇築成などで多くの点が共通していることは、両者に強い関連性があることを示すものと、積極的に評価したい<sup>29</sup>。そこ

<sup>29</sup> しかしながら、つぎのような相違点も浮き彫りになった。まず、エジン＝ホローの靈廟は、大小2つのテントを連結した、いわば「ツインタイプ」の上屋構造だが、アウラガの靈廟は、單獨テントの「シングルタイプ」であった。しかも、アウラガの下部建物の平面規模は一辺が19m、上部建物は11mであったのに對し、エジン＝ホローでは、前テント4.5m、後テント6mと、いずれも小さい。また、エジン＝ホローのテントは車に乗せて他の祭祀場へと運ぶことのできる可動式であったのに對し、アウラガの建物は掘って立て柱を採用した固定式であった。このような建物自體の違いを、どのように理解すべきであろうか。今後の課題である。つぎに、『集史』には9つオールドが、大オールドにあったとある。『蒙古源流』にも8つの白い帳（「八白帳」あるいは「八白室」）と登場する（烏蘭 2000）。しかしながら、その他の靈廟施設はアウラガ遺跡から、いまのところ確認できていない。



で筆者は、内モンゴルの靈廟の源流は、アウラガの靈廟にあると理解したい。

## 7 移動の背景

チンギス靈廟の内モンゴルへの移動は、のちに「オルドス（鄂爾多斯）部」と呼ばれるチンギスの墓と靈廟を守護する集團の、漠北から内モンゴルへの進出と軌を一にしたものと理解されている（Pelliot 1959: 352 など）。当初は一時的な入寇で、掠奪を目的としたものであった。モンゴル族のオルドス北部の河套地域への入寇開始は景泰年間（1450～1456年）で、弘治・正徳年間（1488～1521年）にはこの地に定着したと考えられている（曹 2002: 154）。それではどのような理由で、この集團は南遷したのだろうか。

まず、當時の政治動向をみてみる。1454年、オイラトのエセンが死ぬと、政治が亂れ、ハーンの改廢が頻繁になり、10年ほどの空位時代が起こった（森川 1999: 92-94）。このような政治的不安定が、靈廟およびそれを守護する集團の移住を喚起した原因の一つと考えられる。

しかし、なぜ南遷の道をたどったのか、ほかの要因も考えられる。それは氣候の變化である。15世紀後半から16世紀前半にかけて、中國大陸は全體的に寒冷期であった（竺 1972, 吉野 1982）。『明史』卷28五行志をみると、とくに15世紀後半は寒冷化が強まったことがわかる。明代全期間における寒冷・冷害を示す「恒寒」「雨雪隕霜」の登場回数のうち、「恒寒」は6割強が、「雨雪隕霜」では4分の1が、15世紀後半の50年間に集中する<sup>30)</sup>。屋久島の屋久杉からみた気温變化からは、當時は現在よりも3℃ほど低かったことがわかっている（北川 1995: 47-55）。この数値はモンゴル高原に直接適用できないが、東アジア全體が冷涼化していたことは確かなようだ。文獻史料から中世期の気温變化を復元した研究によると、データの残る7世紀以降で、冬季に限定すると、15世紀後半が最も寒冷であったことが明らかになっている（Maejima and Tagami 1986:

30) 『明史』（張廷玉 [撰]、中華書局版、1974）の卷28五行志の記述に従い、筆者が集計した。



図4 チンギス・ハーン廟の移轉

162-163)。モンゴル高原では、冬季の寒冷・雪害は、体力の弱った家畜、とくに出産期の母親や生まれたばかりの子供に被害を及ぼし、牧畜経済に打撃を与えることで、今日でも警戒されている。

しかも當時は、元末に減少した人口が急増に轉じていた時期であったと考えられている（曹 2002:173）。そのような時期における自然環境の悪化は、通常でも氣候の厳しい漠北の遊牧社會に大きな打撃を与えたであろう。實際1457年にはモンゴルで飢饉が発生したことが報告されている<sup>(31)</sup>。オルドス地域は漠北と比較すると温暖である。現在でも1月の平均気温で8℃ほど差がある。しかもこの時期、河套地域から漢人勢力が後退していたことが史料からうかがえる<sup>(32)</sup>。このような間隙を縫って、オルドス地域への避寒移住が行われたとも考えられよう（図4）。

以上のような當時の不安定な政治的動向、氣候などの自然環境の悪化、さら

(31) 『明實錄』「(天順元[1457]年[五月壬午])虜中飢窘之甚。」「(同年)七月己卯,守備偏頭關都督同知杜忠奏,即今迤北虜人,多以饑窘來歸」。

(32) 『秦邊紀略』卷5 延綏衛,「東勝不復,則河套空虛之地」。『秦邊紀略』(梁汾[撰])は趙盛世他(校注)青海人民出版社(1987)より。

に明との交易に有利などの経済的理由などが複合して、15世紀第Ⅲ四半期から16世紀第Ⅰ四半期の間に、オルドス部の南遷を引き起こしたと、現段階では理解しておきたい。

## 8 ま と め

本論では、チンギス＝ハーン廟について、従来の文献史学の成果に、新たに考古学データを加え、その成立と変遷について考究した。結論はつぎのようにまとめられる。

- ①最初のチンギス＝ハーン廟は、チンギスの宮廷「大オールド」（現在のモンゴル国ヘンティ県アウラガ遺跡）にあった、チンギスが建て、オゴダイが改造した、宮殿テント（下部建物）を転用したものであった。
- ②そこが靈廟となったのは、1235年のカラコルム建都以降である。
- ③13世紀末から14世紀初頭の間に、新たな靈廟が作られた（上部建物）。この靈廟は、元朝滅亡後、15世紀中頃までアウラガの地に留まり、継続して祭祀行為が行われていた。
- ④靈廟は15世紀後半から16世紀初頭に、オルドス地域に移動した。その背景には政治的混乱とともに、気候の冷涼化にともなう遊牧経済の疲弊が考えられる。
- ⑤清代初期にエジン＝ホローの地に造られた廟とアウラガの廟とは、基壇構造、規模やプランの點で、きわめて類似していた。エジン＝ホローで靈廟が再建された際に、アウラガの建物構造を原型とし、それを再現するように造られたことが想定できる。

今後の課題として、靈廟成立の時期と背景、内モンゴルへの移動の理由を、さらに具体的に明らかにしていきたいと考えている。とくにモンゴル民族が繼承する年代記や傳説などとの整合化をはかる必要があろう<sup>63)</sup>。そのためには靈廟跡の科学的な継続的調査が必須である。

63) モンゴル年代記には、チンギス＝ハーン祭祀の起源を1282年にクビライの敕命により始まったとする記述があり、内モンゴル研究者の中では広く受け入れられている（楊 1998: 1）。今回の筆者の検討と比較すると、若干年代が新しい感がある。今後の重要な検討課題である。

## 参考文献

- 宇野伸浩 1988 「モンゴル帝国のオールド」『東方學』第 76 輯, 47-62 頁, 東方學會, 東京
- 岡田英弘 1985 「元朝秘史の成立」『東洋學報』第 66 卷 1-4 合併號, 157-177 頁, 東洋文庫, 東京
- 小澤重男 (譯註) 1997 『元朝秘史』(上) 岩波文庫, 岩波書店, 東京
- 加納哲哉・内田宏美ほか 2003 「モンゴル國チンギス = カン宮殿址における動物祭祀」『日本考古學協會第 69 回總會研究發表要旨』144-147 頁, 日本考古學協會, 東京
- 北川浩之 1995 「屋久杉に刻まれた歴史時代の氣候變動」『講座文明と環境』第 6 卷, 47-55 頁, 朝倉書店, 東京
- 栗林均ほか編 2001 『『元朝秘史』モンゴル語全單語・語尾索引』(東北アジア研究センター叢書第 4 號) 東北大學東北アジア研究センター, 仙臺
- 白石典之 2001 『チンギス = カンの考古學』(世界の考古學①⑨) 同成社, 東京
- 白石典之 2002 『モンゴル帝國史の考古學的研究』同成社, 東京
- 杉山正明 1999 「モンゴル世界帝國の成立」『アジアの歴史と文化 (⑦北アジア史)』, 69-87 頁, 同朋舎/角川書店, 東京
- 那珂通世 1943 『成吉思汗實錄』筑摩書房, 東京 (初版は大日本圖書, 1907年)
- 福澤仁之・安田喜憲 1995 「水月湖の細粒堆積物で検出された過去2000年間の氣候變動」『講座文明と環境』第 6 卷, 28-46頁, 朝倉書店, 東京
- 三宅俊彦・加納哲哉・内田宏美ほか 2004 「モンゴル國チンギス = カン宮殿址における動物祭祀 (2)」『日本考古學協會第 70 回總會研究發表要旨』255-258 頁, 日本考古學協會, 東京
- 村上正二 (譯註) 1976 『モンゴル秘史』(3) 東洋文庫 294, 平凡社, 東京
- 森川哲雄 1999 「明代のモンゴル」『アジアの歴史と文化 (⑦北アジア史)』, 88-111 頁, 同朋社/角川書店, 東京
- 箭内互 1966 『蒙古史研究』刀江書院, 東京 (初版 1930 年)
- 楊海英 1995 「チンギス・ハーン祭祀の政治構造」『內陸アジア史研究』第 10 號, 27-54 頁, 東京
- 楊海英 1996 「オールドス・モンゴルの先祖祭祀」『國立民族學博物館研究報告』21 卷 3 號, 635-708 頁, 吹田
- 楊海英 1998 『『金書』研究への序説』國立民族學博物館調查報告 7, 吹田
- 楊海英 2001 「モンゴルにおけるアラク・スウルデの祭祀について」『アジア・アフリカ言語文化研究』61 號, 71-114 頁, 東京
- 吉野正敏 1982 「歴史時代における日本の古氣候」『氣象』26 卷 4 號, 11-15頁, 東京
- Andrews, P.A. 1981 The Tents of Chinggis Qan at Ejen Qoriy-a, and their Authenticity. *The Journal of the Anglo-Mongolian Society*. 7-2, pp. 1-49, Cambridge

- Bazargür, D. D.Enkhbayar, 1997 *Chinggis Khaan Atlas*. Cartographic Enterprise, Ulaanbaatar
- Boyle, J.A. (trans.) 1971 *The Successors of Genghis Khan*. Columbia U.P. New York
- Duiliukov, S.D. (Дылыков, С.Д.) 1958 Эджен-Хоро. *Филология и история Монгольских народов*. сс. 228-235, Академия Наук СССР. Институт Востоковедения. Москва
- Maejima, I., Y. Tagami 1986 Climatic Change during Historical Times in Japan. *Geographical reports on Tokyo Metropolitan University*. No. 21, pp. 157-171, Tokyo
- Maidar, D., T. Maidar 1972 (Майдар, Д., Т. Майдар) Каменная колонна из Аврагын балгас. *Археологийн Судлал*. 5, тал. 151-156, Улаанбаатар
- Mostaert, A. 1956 Matériaux ethnographiques relatifs aux Mongols Ordos. *Central Asiatic Journal*. vol. 2, pp. 241-294, Wiesbaden
- Pelliot, P. 1959 *Notes on Marco Polo*. Vol. 1, Imperimerie Nationale, Paris
- Potanin, G. N. (Потанин, Г.Н.) 1885 Поминки по Чингис-хане. *Известия Императорскаго Русскаго общества*. 21, сс. 303-315, С-Петербургъ
- Rintschen 1959 Zum kult Tschinggis-Khans bei den Mongolen. *Opuschula Ethnologica Memoriae Ludovici Biró Sacra* (T. Bodrogi & L. Boglar, eds.). pp. 9-22, Akademiai Kiado, Budapest.
- 曹永年 2002 『蒙古民族通史』第3卷, 內蒙古大學出版社, 呼和浩特
- 陳述 1980 「談遼金元“燒飯”之俗」『歷史研究』80年5號, 131-140頁, 北京
- 陳育寧 2002 『鄂爾多斯史論集』寧夏人民出版社, 銀川
- 內蒙古文物考古研究所ほか 1994 「元上都城南砦子山南區墓葬發掘報告」『內蒙古文物考古文集』639-671頁, 中國大百科全書出版社, 北京
- 王國維 1928 「黑韃事略箋證」『海寧王靜安先生遺書』卷37, 石印本
- 王國維 1994 『觀堂集林』中華書局, 北京(初版1959年, 初出1921年)
- 烏蘭 2000 『〈蒙古源流〉研究』中國蒙古學文庫, 遼寧民族出版社, 瀋陽
- 竺可楨 1972 「中國近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古學報』72年1期, 15-38頁, 北京

〔附記〕 本論は平成12年度三菱財團人文科學研究助成, 平成14年度トヨタ財團研究助成, 國學院大學創立120周年記念事業費, 平成14年度科學研究費補助金(B)(2)(課題番號14401002)による研究成果の一部であり, 東洋史研究會平成15年度大會で「チンギス=ハーン靈廟の起源」と題して発表したものを基礎にしている。

economy formed in this way, as the Lixiahe region of Subei in modern times began to develop as main production center that was gradually able to produce stable and massive quantities of Indica variety rice, and in contrast supplied the rice markets in Nanjing and Zhenjiang in the western regions of Sunan as well as in the provinces of Nantong 南通, Haimen 海門 and Qidong 啓東 via Haian 海安.

## THE ORIGINS OF THE SHRINE OF CHINGGIS KHAN

SHIRAISHI Noriyuki

In this study, I have considered the establishment and transfer of the Shrine of Chinggis Khan on the basis of the historical studies of the literature to which I have applied recent archaeological data. As a result, I have made clear that the first Shrine of Chinggis Khan was located at the Avraga site in Khentii Province in Mongolia. This had been the site of Chinggis's palace, the Great Ordo. It has become clear that the palace tent (the lower building) was transformed into the Shrine. It became a Shrine after the capital, Kharakhorum, was built. Later, between the late 13<sup>th</sup> century and the beginning of the 14<sup>th</sup> century a new shrine (the upper building) was constructed. This Shrine remained at Avraga area after the demise of the Yuan dynasty until the mid 15<sup>th</sup> century, and ritual sacrifice of horses and cattles was conducted there continuously.

The Shrine was moved to the Ordus region in Inner Mongolia in the period from the later half of the 15<sup>th</sup> century and the beginning of the 16<sup>th</sup> century. It is thought that behind the move were both political turmoil and the decline of nomadic economy that accompanied cooling temperatures. Both the Avraga Shrine and that built at Ordus in the early Qing period were extremely similar in terms structure of the altars, the size, and plan. One can hypothesize that when the Shrine at Ordus was rebuilt, the structure of the building at Avraga was the model to be recreated in the construction.

Future research should be aimed at more concretely illuminating the background and timing of the construction of the Shrine and the reason for the move to Inner Mongolia. For that reason it will be necessary to conduct continuous research of the site.